塾生の保護者の皆様へ

前略。この度、誠に申し訳ないご報告をしなければなりません。

結論から先に申し上げます。当塾はあと２年をもちまして、閉塾させていただくことにいたしました。すなわち、現在の中１・中２の卒業を見届けたうえで、すべての業務を終了させていただくことを決意いたしました。

当塾は、私が大学在学中の２１歳に開業以来、今年の４月で２９年目を迎えますが、最盛期は７５名いた生徒数も、今年の２月時点ではわずか２０名余りとなりました。少子化はもちろん、塾や教育産業の過当競争、指導スタイルの変化などに対応できず生徒数が減り続け、経営が困難になってきたことが、塾をやめようと決意した直接的な理由です。

しかし、それだけではなく、最近の教育環境全般を見渡した時、どうしても腑に落ちない点が多々あることと、最近の子どもたちや親の変わりようが、私の仕事への熱意を薄れさせているのも事実です。この期に及んで、恨みつらみや負け惜しみに聞こえるかもしれませんし、一部の方から見れば時代錯誤と思われるような不愉快な点もあるかもしれませんが、これから述べることは私の正直な思いでありますので、最後まで目を通していただければ幸いです。

現代の子どもたちを取り巻く教育環境は、悪化の一途をたどっています。

まず、第一の問題は、親や周囲の大人が子どもを甘やかせすぎ、自由にさせすぎることです。中には子どもの言いなりになっている親もいます。

最近の親は、子どもが気に入らなければすぐに塾や習い事をやめさせます。親からすれば、子どもが選んだ塾で、仲の良い友達と一緒に、やさしく手取り足取り教えてくれる先生のもとで機嫌よくやってくれる方が、気楽で安心できるからにちがいありません。しかし、「石の上にも三年」と言いますが、何事を始めても、せめて三年は続けさせなければ、何も身に付きませんし目立った成果も出ないと思います。塾に限らず習い事や部活動などについても、子どもが飽きたり気に入らなくなったりすればすぐにやめさせることが多くなりました。

ちょっとしたことで、なんでもすぐにあきらめたりやめたりすることが、大人になっても仕事が長続きしない最大の原因ではないでしょうか。何であれ「やめる」際には、大きな決断と次に絶対に失敗してはならないという強い意志がなければなりません。しかし、最近は、親の離婚もそうですが、何事も安易に結論を出しすぎです。「やめる」ことに、あまり負い目や抵抗を感じていないようです。本来なら、子どもが何かをやめ

ると言い出しても、子どもに選択権を与えるのではなく、まずは「絶対にやめてはだめ」とか、「続ければ、あとでよかったと思える日が来る」とか言って、親が権威を持って、子どもに我慢や忍耐を教えるべきです。その際、親も根気と苦悩が必要ですが、最近は親自体がそういう面倒なことを避ける傾向があります。「子どもの意志を尊重する」とか「個性を重視する」なんて言葉が、親が楽をするための言い訳やなぐさめの言葉になっています。

昔は、塾をやめる生徒は、年に２・３人くらいしか出ませんでしたが、最近は当塾でも、ただでさえ塾生が減っているにもかかわらず、年に４人、５人とやめていきます。以前は、子どもが塾をやめると言いだせば、保護者の方が血相を変えて相談に来られました。そして、親と先生がいっしょになって、やめたいという子どもを根気よく諭したり説得したりしたものです。しかし、最近は事前に何の相談もなく、電話一本で「やめます」と言って、それっきりというのが増えました。挙句の果てには、先方の一方的な理由で月途中にやめるにもかかわらず、「今月は全部来ていないから、残りの月謝を返してくれ」と、ぬけぬけ言ってくる親もいました。やめる際に、「いまどき、携帯を持たせてくれない塾なんて行きたくないと、子どもが言うので」と、言われたこともあります。

また、最近流行の「個別指導」や「マンツーマン」、「生徒のペースに合わせた指導」、「曜日や時間が選べる塾」、「好きな教科を選べる塾」、「自習室」など、甘い言葉に親子ともども誘われて、そんな塾にかわると言って、やめていく生徒も多くなりました。

私は、「手取り足取り」の指導は嫌いです。また、勉強はあくまでも学校の授業が基本で、最終的には家庭学習がものを言うと思っています。塾は、それらの足りないところを補うものであって、塾がメインになっている最近の教育状況はおかしくなっていると言わざるを得ません。

これだけ少子化になり、一人当たりにかける教育費用が増え、ほとんどの子どもが塾に通いながらも、学力が低下しているのはおかしいとは思いませんか。私も、子どもたちの学力低下はひしひしと実感しております。小学校高学年になっても九九ができない生徒、漢字がさっぱり書けない生徒、分数の計算ができない生徒などは珍しくありません。それ以上にやっかいなのは、文字が乱雑で読めない生徒、書いた文章の意味がさっぱり分からない生徒などです。「自分が読めたらいい、自分が分かればいい」などとすまして、一向に直す気配がありません。このような例はやはり幼いころからのしつけができていないためと考えられます。

教育というものは、かけるお金や一時的な塾通いで変わるものではありません。やはり幼い頃からのしつけ、低学年での漢字や計算の反復練習、周囲との競争、親や先生からがみがみ言われ、こきおろされながらもそれに対する反骨心、負けん気など、古き良

き時代の教育方針が現代にも絶対に必要だと思います。

また、時間や教科を選べたり、個人の都合で休んでも補習授業が受けられたりする塾は、一見利用者の側から見れば便利で都合の良いことかもしれませんが、実は大きな問題をはらんでいるのです。子どものころから自分の都合ばかり通してきた人間が、いざ大人になって社会に出ると、それで通用するでしょうか。自分の都合で、上司から命じられた仕事を断ったり、お客様を待たせたり、予定を変更したりできるでしょうか。子どものころから、お客様気取りで塾や習い事に通わせるから、周りが自分に合わせてくれない環境に置かれると、不満を積もらせ、すぐに仕事を辞めてしまうのです。

繰り返しになりますが、子どもの意志ばかり尊重していてもロクなことはありません。子どもは、得てして楽な方、心地よい方、見栄えの良い方を選ぶものです。「好きな時間に好きな教科を」なんて、子どもの都合に合うようなことばかりさせていたら、なんでも自分の気ままに我がままできることが当たり前と思うようになり、大人になっていざ仕事をし始めても、自分の思い通りにならなければ、すぐに仕事をやめてしまうのは当然です。

「やめる」のが平気で、一旦「やめ癖」がついてしまった人間は将来、厳しい社会に適応できなくなり、引きこもりになったりニートになったりして、いい年になっても親を悩ませることになるのは目に見えています。「因果応報」のことば通り、子どもを幼いうちにしっかりしつけ、教育することを怠れば、結局その報いは親自身に返ってくるのです。子どもの頃は、不条理だと思うこと、自分の思い通りにならないことに慣れさせることが必要なのに、今では周りの大人が子どもたちを甘やかせ、言いなりになるばかりで、我慢や辛抱を教える機会が本当になくなってきました。

また、無料の義務教育や、値段の安い塾が軽視され、「個別授業」や「教科選択制」で高い月謝やオプション料金を取られて、結果はどうであれなんとなく安心している親が増えてきました。しかし、塾に行かずとも家庭でこつこつ勉強して結果を出している生徒も少なからずいます。まずは、子どもたちに学校の授業と家庭学習が最も大切であるということを植え付けて、塾はそれの足りないところをカバーする補助手段だととらえなければ、ちまたにあふれる教育産業の「不安をあおる」商法を真に受け、「ほかの子がやっているから、うちの子だけやらさないわけにはいかない」といった義務感を持たされ、どんどん出費は増すばかり、商業主義の餌食になるだけです。塾や予備校の言いなりになって高い月謝を払い続ければ、高校卒業までに相当な額になることは言うまでもありません。肝心の大学や専門学校進学に影響を及ぼすのは目に見えています。

子どもに惜しみなくお金を費やしたり、どこへでも車で送ってやったりするのが愛情ではありません。「友だちがみんなスマホを持っているのに、うちの子だけ持っていな

いのはかわいそう」と、スマホを買い与えるのは間違いです。スマホを持たせたあげくに、勉強に集中できなくなったり、友だち同士のつまらぬトラブルに巻き込まれたり、下手をすれば、変な大人につけ狙われて取り返しのつかない事態に陥ることもありうるのです。中学生は勉強と部活をしていれば十分です。そこへ、親が無益な遊び道具を与えるから、肝心なことがおろそかになるのです。

子どもの苦労を見るのはつらいかもしれませんが、親はよほどのことがない限り安易に手を差し伸べるのではなく、子どもが苦難や困難に直面しても、できるだけ自分で考え、解決する機会を与えることが、結局は子どもの自立心をはぐくみ、「生きる力」になるのです。

最近は親自体も幼稚すぎます。親がスマホに夢中になっているのだから、子どもにスマホばかりするなと言っても説得力がありません。ブランドで着飾ったり、ネイルなんかして家事をおろそかにしている母親がいます。いい年をして、いまだにゲームをやっている父親が多くいます。

また、共働きするのはいいのですが、その収入を、なにか見栄や外見を飾るものばかりに使っているような気がします。新しい家電が出たらすぐに買い替えたり、無駄に大きくいかつい高級車に乗ったり、休みごとに外食に行ったりと、せっかく苦労して稼いだお金を有意義に使っていないように見えます。そんな親の姿を子どもが見ていれば、大人になってそれを真似るし、「うちはお金があるんだ」と思って、いつまでも親を頼りたくなるのは当然です。そんな無駄なことにお金を使うのなら、収入は減るかもしれませんが、親の一方が家にいて子どもを悪い道に走らないように見守ったり、道徳や礼儀などのしつけをきちんとするほうがよほどましです。

少し貧しいくらいの方が、子どもは「うちにはお金がないんだ」と思い、スマホや高価なスポーツ用品もあきらめるのではないでしょうか。そして、「頑張って身を立てて将来お金に困らない身分になるぞ」というハングリー精神も育って来るのではないでしょうか。

とにかく、子育ては「厳しく」が原則です。いつまでも子離れできない親には罪があります。動物を見てください。ある時期が来れば、親が子どもを追い回したり、咬みついたりして、必死になって親離れさせようとします。それに引き替え、最近の親ときたら、いつまでも子どもにべったりで、子どもの自立を阻止しているとしか見えません。昔は中学生にもなれば、親と一緒にいることが恥ずかしくてしかたありませんでした。さらに、高校生くらいになると、こんなうるさい親から離れて早く自立したいと思うのが普通でした。

どこかの大学の学長が入学式で言っていました。「大学の入学式に親が臨席するのはど

うしたものか。１８歳にもなれば子どもは親の所有物ではなくなり、一個の独立した存在であるべきだ。いつまでもべたべたするものではない」と。また、会社を辞めるのに、直接本人が会社に伝えず、親が代わりに断りを入れに行くというのは、異常としか言いようがありません。

これらのことをふまえて、一時は、私が「厳しい昔ながらの教育を復活させなければ」とも考えましたが、時代の流れはちっぽけな個人の手では止められません。それに、時代遅れの教育をして生徒が集まらなければ本末転倒です。さらに、３０年近くやってきて、正直マンネリ化もありますし、年齢と共に情熱の衰えも感じざるを得なくなりました。

また、ここ数年、個人的な収入減はおおうべきことのない事実です。しかし、長年、授業料をできる限り抑え、みなさんにご負担を掛けぬよう商売抜きに正直にやってきたつもりです。しかし、さすがに将来のことを考えると、このままでは困窮するのは目に見えています。そこで、２年ほど前から午前中だけですが、身体障がい者施設のパートに出るようになりました。そこで働いているうちに、新たなやりがいを見出し、もし転職するなら福祉関係がよいと考えるようになりました。塾をやめる決意ができたのも、次にやりたいことが見つかったからでもあります。今年から、福祉関係の資格を取るために勉強を開始します。

ただ、新中２・中３生の授業をいきなりやめることは、お子様方にもご家族の方にも多大なご迷惑がかかると思い、４月からは２学年で１０名ほどの生徒数になろうとは思いますが、彼らは卒業まで見届けさせてもらおうと思っております。一方、小学生や新中１生の授業を続ければ、午前中パートに通い、昼間に資格の勉強をしながら、夜、週６日の授業をこなすことになり、それはさすがに無理があると考え、募集を停止させていただくことになりました。とにかく、残り２年の授業は責任を持って、全力で全うする所存でございますので、ご安心ください。

この紙面にて語りつくせないことはまだまだありますが、これが塾をやめるに至った大まかな経緯と私の正直な気持ちです。お子様への説明は３月の最後の授業時にいたします。

勝手ながら、こちらの都合ばかり申し上げ、心苦しい次第であります。また、突然のことで、誠にご迷惑をおかけするとは存じますが、当方としましても熟考の上での結論ですので、なにとぞご理解のうえご了承ください。

平成２７年３月２４日

[redacted]塾・塾長 [redacted]